書　　評

地球文化研究所『未来学原論—21世紀の地球との対話—』

財団法人文化建設会，1968年（1973年再版），542ページ

本書は“文化建設会”という法人が発行したものであるがB５版542頁の大型本である．英訳でGlobalismとしてあるが日本人の頭脳でまとめたということは一つの業績である．内容は理論篇と実現篇に大きく分れ，理論篇の中に「未来科学のグローバリズム的構成」「綜合人間学」「現代文明心理研究と未来的心理分析」「未来哲学観の確立」「原子力文明は生存しうるか」を論じ，実現篇の中で「21世紀の理想と現実」「地球的人間から宇宙的人間へ」「未来情報世界創造へのデザイン」「破滅か創造かの未来地球像」「新しき地球信仰の照応」が述べられている．序文の中に“未来国際会議が開かられ云々—専門的な意見や論議が交わされたにも拘らず，その本質やシステムは不明確にとどまった云々”と書かれ，この問題論に大胆卒直に答えようとする野心的なものを感じた．

したがってグローバリズムの原理に始まり人間理解の問題が説かれてくる．そして今までの学問があまりとりあげようとしなかった深層心理学的な洞察を基にして世界の諸民族への考察，未来哲学観への志向が過去の哲学的人間学への批判としてなされてもいる．つまり，カントやニーチェ，フォイエルバッハ，マルクス，フロイドなどかなりの人間観に触れていながらGlobal Anthropologyとして，共通思想の分野をかなり持っていると思われるコントやシエラーの人間観が触れられていないことが何故か不思議であった．

だが今までの科学者が現象として皮相にしか捕えていなかったものを掘り下げ，現代文明の諸問題の中で“人口問題をいかに解決するか”ということが述べられてもいる．そして今日の自然科学による技術的支配の限度を訴えているが，物質経済支配の精神的基盤の変改が此処で出てくる．さらに特筆すべきものとしては文明のCybernetics に対する論評であるが，此処に疑問が投ぜられていることは今日の人間工学を見れば当然肯づけるものがあろう．したがって人間の主体性というものを中心にして述べられていることは確かであるが，その人間の復活を神話に求めようとする傾向が随所に出てくる．

一口に言うと本書は，アレキセス，カレルまでは立ち入っているが，やはり文学的傾向が強く，総論的な方向としては神話創世へのあこがれを強く示し，過去を批判しつつ未来へ向っての何かの活路を見出そうとしている論議でもある．言い換えれば過去への“あきらめ”と未来への夢とのバランスの中に人間の新生を求めようとしているかに思われた．

しかし実現篇において21世紀を対象として，新しい原想論を展開していることは確かに特徴ある出色なもので，この思い切った未来図への発言は重要なものを持っているといってよかろう．

たとえばGlobalismからCosmicalsmへの転換，地球公園化構想への展開，欧米の西洋博物館化，半同性異性愛的傾向の発言など，それであるが，特に関心のある予測は第三次大戦の問題で，それは東と西，南と北といったものではない．欧米文明の持つ非人間性から，それは西と西との間の内部大戦であるといった示唆は大胆な発言でもあろう．

本書に一貫して流れている思想は，自然霊性的な神話思想主義であると言ってよいが，遺伝的なものへの探求や，人類学を活用していながら，人類生態学や人類動態学的な文明問題の追求が薄かったことが惜しまれる．

しかし人口問題を研究するものにとって，これが単なる翻訳ではなく定めし多くの研究者によって練られたものと思われるだけに参考となるものがあると思うし，今後学際的研際的方向を取らざるを得ない人口学者は日本人の頭脳としてこれ位のものが書けないではといった警告書でもあろう．　　（篠崎　信男）